●せいてん質問箱

「願以此功徳…」の言葉には、どういう意味があるのか？

●質問● 「正信偈」や「重誓偈」などをお勤めするとき、最後にかならず「願以此功徳 平等施一切 同発菩提心 往生安楽国」と唱えますが、この言葉はどういう意味があるのですか。

仏前の勤行の終りに唱える偈文のことを、回向あるいは回向句といいます。回向句にもいろいろあります。たとえば葬儀の際の出棺勤行では、龍樹菩薩の「十二礼」の「我説彼尊功徳事 衆善無辺如海水 所獲善根清浄者 回施衆生生彼国（われ、かの尊の功徳の事を説くに、衆善無辺にして海水のごとし。獲るところの善根清浄なれば、衆生に回施してかの国に生ぜしめん）」（一四四二頁）の文が用いられていますし、「往覲偈」の「其仏本願力 聞名欲往生 皆悉到彼国 自致不退転（その仏の本願力、名を聞きて往生せんと欲へば、みなことごとくかの国に到りて、おのづから不退転に致る）」（四六頁）なども、よく用いられる回向句です。今ご質問の言葉も数ある回向句の中の一つです。

それでは何故お勤めの最後に回向句を唱えるのでしょうか。子登の『真俗仏事編』三には、「亡者の為に経を誦み、真言陀羅尼を唱ふ、その功徳を回らして、彼の亡者に向はしむ故に回向といふ」とあります。これによれば回向句を唱える意義は、仏事法要を勤め、その功徳をもって亡くなった方および一切衆生に分かち与え、その方がたの仏道を成就させようとするところにあるというのです。この考え方が一般的なのでしょう。

しかし浄土真宗は自ら修めた功徳を回向して仏道を成就しようとするものではありません。阿弥陀如来の回向による仏道の成就を目指しています。よって回向句も、自らが仏事法要を修めた功徳を他の人々に回向するという性格のものでないことは明らかです。

「願以此功徳」等のご文は、善導大師のお書きになった『観経疏』「玄義分」の巻頭に示された「帰三宝偈」の最後の一行四句です。善導大師が『観経疏』をおつくりになったのは、僧も俗も含めたすべての人々に、ただ信心をいただいて欲しいという思いからです。そのお心がこの「帰三宝偈」に一貫して流れています。偈文の初めには「道俗時衆等 各発無上心（道俗時衆等、おのおの無上の心を発せ）」といい、次に「共発金剛志（ともに金剛の志を発して）」といい、最後に「同発菩提心（同じく菩提心を発して）」とあります（一四五一～三頁）。無上心といい、金剛志といい、菩提心と言い方は異なっていますが、意は一つであって、ただ他力の信心をいただいて欲しいという善導大師のお心を示しています。

この善導大師のお心に添って、「願以此功徳」以下四句の意味を窺ってみますと、まず「此功徳」とは、名号の功徳、阿弥陀如来の人々を救うはたらきと解することができます。そして「平等施一切（平等に一切に施し）」とは、行者自らが修めた功徳を回向することをいっているのではなく、「此の功徳」をいただいた念仏者の常行大悲のすがたをあらわしたものです。

阿弥陀如来の功徳（名号）をいただいた念仏者は、現生十種の利益の一つである常行大悲の利益を得ることができます（二五一頁）。親鸞聖人は十種の益について、『教行信証』「信巻」真仏弟子釈下で経文や釈文を引いて明らかにしています。常行大悲については、道綽禅師の『安楽集』を引き、次のように示しています。

『大悲経』にのたまはく、〈いかんが名づけて大悲とする。もしもつぱら念仏相続して断えざれば、その命終に随ひてさだめて安楽に生ぜん。もしよく展転してあひ勧めて念仏を行ぜしむるは、これらをことごとく大悲を行ずる人と名づく〉」と　（二六〇頁）

これによれば、常行大悲とはまず自らが念仏することであり、他の人々に念仏を勧めることであると示されています。自ら念仏すること（自信）が、すなわち他の人々に念仏を勧めることになる（教人信）ということです。この教人信を示しているのが、「平等施一切（平等に一切に施し）」のご文です。

また「同発菩提心　往生安楽国（同じく菩提心を発して、安楽国に往生せん）」ですが、菩提心とは他力の信心のことであり、安楽国とは阿弥陀如来の浄土のことですから、皆ともに信心をいただいて、阿弥陀如来の浄土に往生しよう、という意味になります。つまりここでも、『観経疏』「玄義分」に一貫している信心を勧める善導大師のお心を知ることができます。そのお心をいただき、回向句として経典読誦の最後にお勤めしているのです。決して経典読誦の功徳を回向するといった意味ではありません。

（龍谷大学助教授　普賢保之）